少女反逆～少女権利　第二章～

Circlecafe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女反逆～少女権利　第二章～

【Ｎコード】
Ｎ１３４７Ｐ

【作者名】
Ｃｉｒｃｌｅｃａｆｅ

【あらすじ】
不死のロナを迎えにきた少女マティア。
「不死だからって、勝てるわけではない」
首を落とした剣の血を拭う。

少女権利の続編になります
▼シリーズ一覧はこちら
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｓ０８９６

a

序話

明るい黄色の眼が捉えた世界。
長い黒髪が強い風になびく。

同じ様相の、背の高い建物が無数に並んでいる。
自分もその中の一つの一番上に立っているのだ。
太いダクトや様々な仕組みをもっているその高い塔のような建物は、
隆起した生物の一部のようにすらかんじる。

「貴様が今回の成功者？随分と貧相だな」
風の吹く方とは逆、背面からした声に振り向く。

勝気な雰囲気を湛えた少女。
白銀の髪がキラキラと太陽の光に反射して美しい。
少し不愉快そうな表情でこちらを見つめる深い紫色の瞳。
そのまだ幼さの体を包むのは特別にあつらえた軍服。

「せいこうしゃ…？ぼくはもういやなのに」
声に振り向いた、少し痩せ気味の少女”ロナ”は元気なくそう答えた。

「…嫌？不死の体を手に入れてそんなくだらない戯言を…」
憎悪を感じる言葉とともに、銀色の光が横に一閃する。

「がひゅ…！！　あ…なにするの…あ」

皮一枚、それだけ繋がった状態でロナの首はだらりと後ろに。

その首を切り離した細身の剣を鞘に収めながら逆さになったロナの顔を鷲掴みにする。
「いい？小娘、あんたは今から私の管理下に置かれる調子に乗るんじゃないわよ？」
ロナの逆転した視界は正常に戻る。
首の切り口を合わせるように元に戻されたのだ。

「げほっ…げほっ…」
血反吐を少し吐き出す。
「はぁ…はぁ…いきなりなにするんだ！」
噴出した血糊だけ残し何もなかったように繋がった首を軽く回すと飛び掛るロナ。
「…わからないか？」

「ぎゃうっ！」
腹が開きその中身をぶちまける。
「あぐあぁあああああ…」
信じられないような激痛が五感全てを奪う。

「不死だからって、勝てるわけではない」
剣を振り、付着した血を払う。

再生をしながら、ロナの戦意は失せていく。
勝てない、そんな事が手を震わせる。
「ついて来い、死なないだけの道具が」

けたたましい音を立て、黒いヘリが一台ロナ達のいる建物の屋上に近づいていた。

第一話

「糞餓鬼…この先で何かしたら、永遠にバラバラにし続けるぞ」
ヘリで運ばれた巨大すぎる建物の中をだいぶ進み、とりわけ荘厳な扉の前で、白銀の髪の少女はそう言った。

「ぼくのなまえはロナだ…ごぼっ！がふっ…」
口の中に突き刺された剣。
閉じなくされた口からドボドボ血があふれる。
「二度とその名前を私の前で名乗るな」

ジュルッ…剣を引き抜かれ、口を押さえたロナを尻目に扉をノックする。
「マティアです、例の成功例をつれてきました」
彼女の名はマティアというらしい。
その扉をひらくと、多くの書物を貯蔵している部屋。
その奥のしっかりとしたテーブルの長い黒髪の女性。
その眼も漆黒、衣服も黒。
「あら、待ちわびたわ」
読みかけていた本を閉じるとマティアにこちらに来いと手招きする。

「あらあら、マティア、いじめすぎじゃないの？」
血だらけのロナを見て言われた事にマティアは唇を噛む。
「嫉妬ね、あなたらしくもない」
その女性は立ち上がりロナのところまで静かに歩く。
「はじめまして、ロナ。私と同じ名前を持つ娘」
その冷たい手で頬を撫でられロナの体は硬直する。
「マザー、どうしてこんなただの道具にあなたと同じ名を！！」

マティアが悔しそうに拳を握る。
「戦局は好調よ、もう不死は戦場に必要ない数いるの」
ロナの顔を撫でながら答える声は淡々と。
「では…何故まだマリアシステムを動かしているのですか！！」
どうしても許せないのであろう。
マティアがマザーと呼び敬愛する存在の、もう一人のロナ。
「ん？あなたも妹くらいほしいでしょう」
本当に愛しそうにロナを見つめる。
「私は妹など…」
「黙りなさい」
マティアの体がビクリとする。
「理解したいのなら学びなさい、あなたの役目は”管理”その枠をでるチャンスよ？」
ゆっくりと振り向いて話し出す。
「私の名前はロナ・ハルドそれはわかるわね？」
ハイと俯きながら答える。
「そして私はあなた達の母、それもわかるわね？」
恐ろしく冷たい目線。ロナ・ハルドという名の女性はマティアを見据える。

「私のことを愛しているかしら？」
「は…はい…もちろんです…」
「では、簡単な話ね、この子とマリアシステムを一階から登りなさい。わかった？」
「はい…」

その会話の中、ロナが口を開く。
「おなじなまえなの？」
そのトーンは今までのように純粋で無垢な。
「そ、あなたは少し違うからね、わかりやすいように同じ名前をつ

けたのよ」
マティアに話すのとは違った、子供に話すような優しい響き。
「でもおかあさんじゃないよ」
ロナの言葉にマティアがたまらず剣を抜くが、ロナ・ハルドの目線にしまう。
「あなたは賢いわね、マティア、出かける前に見せてあげなさい」

第二話

ロナ・ハルドの部屋を出てだいぶ離れた時、マティアがロナの首を掴み壁に叩きつける。
「いい？貴様は兵器だ、本来なら不死は戦場に出るべき存在だ！」
ロナの喉からヒュウヒュウとした音だけしか出ない。
それほど強く掴まれている。
「貴様が何がちがうのかわからない、ただあの人は私達の母だ！」

ドサ…

ロナの体が落ちる。
「げほっ…ちがうよ…」

「見せてやる…」

向かった先は、青い光に包まれた、機械にまみれた部屋。
「これでわかっただろう？私達はあの人が作った」
その機械のなかに埋もれる大量の容器。
容器といってもそれなりに大きく、その中に浮かぶのは一糸まとわぬ少女。
青い光はその中を満たす液体の発光。
一人に一つ、そんな風に並べられた容器の中で少女達は静かに眠っているように見える。

「はじめてあの人に会って、貴様には実感がないだろうが…」
マティアが話し出す。

「はじめてじゃないよ」
ロナの発言に顔が強張る。
「貴様…いいかげんにしないと…」
剣に手がかかる。
「見てたもん。ぼくがおきたとき、窓からみてたひとだよ」

バキ…

マティアの奥歯をかみ締める音。
「…本当だな…違えば許さんぞ」

マティアは単身でロナ・ハルドの部屋に向かう。
その手には布袋を持って。
布袋からはみ出すのは足。
ボタボタと血を床に残しながら廊下を進む。

「あうぁあああ…かえして…かえして足…」
剣が背中から床に貫通している。
膝から下、手首の無いロナはそこから動けないまま、持ちられた
自分の一部を泣きながら求める。

「あら、早いのね」
扉をあけるとハルドはこうなる事を知っていたように、マティアを
待っていた。
「あの餓鬼をスタートさせるとき、あなたはマリアシステム内にい
たんですか！」

「いたわよ」
簡単に答えられる。
「マティア、あなたは不死になりたくないのかしら？」
突如の質問。
「私は…なりたい…です」
「あら、何か不安でも？」
わざと答えれないような質問をロナ・ハルドは行っているのだろう。
「どうしてマリアシステムを経由した子達は不死なのか、わかる？」
少しの間。
「わかりません」
そう答えるしかない。
あのシステムが偉大なる発明である事は確かなのは知っている。
今まで、幾人も再生力が強いだけの存在があそこを経て不死になったのを見てきた。
それを回収に行き、戦場へ出す。
それがマティアの仕事みたいなものなのだから。
「答えは簡単なのに…できの悪い子ね、教えてあげるわ
あれは不死を生み出すシステムだからよ」
馬鹿にされているような答だ。
科学、宗教、そういった人類の知識。生み出される必然の方程式があそこには組まれていると教えられている。
それだけで何がわかろうというのか。
「…わかりません」
そう答えざるおえない。
「そうよ、あなたにはわからない」
悔しさが胸を掻き乱す。
「マティア、勘違いはよくないわ」
何を勘違いしているのだろうか、わからないのは当然だと言い返したくなる。
「当然よ、あなたは学者でも研究者でもない」

ロナ・ハルドは確実にマティアの考えを見え透いた状態で楽しんでいるだけなのだ。
「マティア」
少し強く名前を呼ぶ。
「教えてあげるわ、あなたは学者でもないし、研究者でもない」
同じ事を繰り返され、さすがに堪えている涙も溜まりだす。

「お門違いよ、あなたがあのシステムが何故不死を生み出すかを理解する必要は無い」
必要は無いという言葉はまるで自分に言われているようだ。

「どうやったら不死になれるか。そのほうがあなたの立ち位置から考える事としては余程有意義だわ」

「あ…」
ハルドの話していた意味をようやく理解した。
涙を拭い背筋を伸ばす。
母は自分にチャンスを与えてくれているのだと。
「マザー、ありがとうございます！」
その瞳は真っ直ぐに。
「当然よ、娘だもの。仕方ないとはいえ、戦争に使うばかりでは嫌なのよ」
優しい笑顔が向けられる。
マティアは、今度は嬉しくて泣きそうなのを堪えた。

第三話

ロナは血を流しすぎたのか、ぐったりと床に体を預けていた。
だいぶもがいたのだろう。
持ち前の再生力は出血を止め、切り取られた四肢の繋がっていた場所は皮膚でふさがれている。

「おい、餓鬼」
マティアの声で真っ青になってしまった顔をあげる。
「あ…」
バラバラとロナの手首、足を目の前に落とす。
「あ…あ…あ…あくうう…」
体を前に出すと突き刺さった剣がまた体を裂く。

「ほら」
「いぎぃいいいいいいいいいいいい」
マティアはその剣を引き抜くと、塞がったロナの傷、手首、膝下を薄く傷つける。
勢い無く血液が流れ出す。

その血液が、切り離された部品に届くと…

じゅるじゅる…

気味悪い音がしてロナの体に引き寄せられていく。
「はぁ……はぁ……」
荒い息遣い。
手首が一つ、元あった場所に届く。

にゅ…じゅる…ピク…

動かなくなったはずのロナの指が反応する。

「はぁ…はぁ…はぁ……」

他の残りの四肢も同じ様につながり

両手をつき、ふらつきながら体を起こすロナ。

「おなかすいた…」

その一言。

これだけ圧倒的な差を見せ付けられてはマティアに反抗すらしようとは思えないのだろう。

その姿を見るマティアは少し昂揚した表情だ。

「マティア…泣いてたの…」

息を切らしながらロナにはじめて自分の名を呼ぶ。

一瞬で駆け上がる苛立ち。

「貴様…！！」

頭を鞘にはいったままの剣で強く叩くと、ロナは気絶したようで静かになる。

マティアはたっぷりと、意識の回復したロナに食事を与えた。

「おいしい！クッキー！！」

大好物のクッキーを見つけ散らかし食べる。

顔色は戻り元気もよい。

さっきのような仕打ちをしたマティアにも別に嫌悪を示さぬ姿に、

なんとも言えない感情がモヤつく。

その後は入浴。
本当は食事の前に入れといったが、あまりにも五月蝿く、そうせざるおえなかった。

「汚いな…」
マティアはロナの着ていた服を捨て、自分と同じような軍服を用意しておく。
「チッ…」
あんな餓鬼の為になんでこんな事、という気持ちが舌打ちをさせる。

「どうして…どうしてすてたんだ！！」
はじめてロナの攻撃を受けた。
頬にジンジンと痛みを感じながらマティアは起き上がる。
「アリドラのくれた服…アリドラの服なのに！！！！」
ロナは激しく怒っている。
「アリドラ？」
すかさずロナの肩口に剣をつきたてる。
「なんでもいいが、逆らうなと教えただろうが！！！」
剣は刺したまま、先ほど自分がやられたように、強く顔を殴る。
「ぎゃふっ！！」
ロナが床に叩きつけられる。
「いいか、大人しくこれを着ておけ」
一瞬ロナはそれでも抵抗するそぶりを見せるが、その強い視線に怯えて体をすくめる。

「アリドラはぼくをすてたから…服だけはすてたくなかった…」
そう呟いて泣く。
「だからなんだそのアリドラってのは？」
ロナがいきなり大泣き状態になりめんどくさそうにマティアは頭を掻く。
「アリ…ドりゃは…なにも…はなしてくれなくなっひゃ…うぇええええええええええええん」
裸のまま、鼻水と涙で顔をぐちゃぐちゃにする。
「うっとおしい！」
「ぎゅふ！」
マティア今度は硬い靴底で、ロナの顔を踏み潰した。

第四話

「嫌がるんじゃねぇ！！」
逃げようとするロナの頭に石を投げつける。
「ちっ…なんで私がマリアシステムなんかに…」
マリアシステム。ロナがアリドラと過ごしたものを含む、その生き物のような高い塔の総称。
その一つの前に、二人は来ていた。
送りのヘリは今はだいぶ遠くに小さく見えるだけ。
「いやだ…もう…ここはいやだ…」
ロナが嫌がるのは無理もない。
ここはかつてアリドラといた場所。
「ほかのじゃだめ？」
ロナが哀願する。
「マザーの指定だ」
投げた石を拾い上げ叩きつける真似をしてロナを従わせる。

ゴン…

重い鉄の入り口の扉が開く。
「案内しろよ餓鬼」
マティアはまだ見ぬ閉鎖世界…”かつての住人としてのロナ”にそう命令する。
「え…こんなのしらないもん」
その態度に首根っこを掴みあげる。
「なんだと！ふざける…」
「ほんとにしらないもん！こんな部屋きてないもん！！」
半分怯え混じりでロナは必死に否定する。

「もっと上の階にいたのか」
そうなんだろうなとマティアは理解する。

ドン…

中に入ると重い鉄の扉が閉まる。
「わ…まっくら…」
警戒を張り巡らせる。

シュシュ…
壁につくられた溝に火が走り部屋を照らす。
まるで二人を歓迎するように。

「あらあらあら、いらっしゃい。はじめて人がきたわ?」
闇の中で照らされた血だらけの少女をひきずる女。
「この子で遊ぶのも飽きてたのよ…だいぶまえからね!!!!」
いきなりマティアに飛び掛ってくる、飢えた犬のように。
「く…」
素早く剣をぬき受け止める。
相手の鉄の棍のようなものがビリビリと反動する。
「なんだ…いきなり…」
間合いをとるように離れる。
「…!!」
剣に亀裂。

「あはぁ…あそぼ?」
自分と同じ年くらいか。
そう明るく無いこの部屋の中、近づいたときに見えた汚れきった顔の血走った眼。

バリバリに血が乾いて付着して何色かもわからない髪。
そして、もうずっと洗われていないだろう体の鼻をつくような匂い。

ドン！！

「あははは！！」
狂ったように打ち込んでくる。
「わたしはね！！まいにちまいにちまいにちまいにちまいにちあの子を死なないように死なないように死なないようにおもちゃにするだけの毎日に飽きてたの！！！」
ぎゃあぎゃあとがなりたてながら滅茶苦茶に打ち込んでくる。
マティアも防戦するしかないくらい早く強い。

「獣……」
そう言いたくなるような動き。
「く……」
壁が背につく。
剣は亀裂が増え、あと何発あの重い棍を防げるかわからない。

ドゴ…

「あはぁあああああああああ」
顔がくっつきそうなくらいに近い。
腐ったような匂いの息に鼻が曲がりそうだ。
マティアの体はギリギリのところでなんとか保たれている。

ビシ…

嫌な音。
亀裂が広がる。

「殺さないよ、殺さないよ。再生の速度にあわせてあそんであげるずっとおおおお」
ベロリと顔を舐められる。

ビシ…ゴン…ゴン…

「？」
剣の割れていく音に加えて何か違う音。
ぼんやり照らされた向こう側。
「…！！」
ロナがまっすぐ見つめる先、天井の一部が降りてきている。
「階段…？」
上に続く階段だ。
それがゆっくりゆっくりと降りてきているのだ。

「あはぁあああ剣折れちゃうねぇえええええええ」
気がついていないようだ。

壁のでっぱりを利用して、まだ降りてきはじめたばかりの、だいぶ高い位置にある階段に飛びついてよじ登る。
「お…おい…餓鬼！！！」
マティアが思わず叫ぶ。
「べーーーーーー！いじわるするマティアなんてしーらない！」
舌を出して大声で言うロナ。
「あらららら？」
グリンとマティアを押さえ込んでいた顔がロナのほうに向く。

「なによそれぇえええええええええええええええ」
マティアを壁に叩きつけロナに向かってものすごい勢いで走り出す。
「く…」
階段はだいぶ下まで降りてきている。
マティアは先ほどまでの攻撃のダメージで足が動かない。
「はやく…動け…」

「あはぁあああああああああああ　なにそれなにそれなにそれぇえ
えええええええ！！！」
棍を投げ捨てるほど興奮して階段で佇むロナに飛びつく。
「ばーーーーーーか」
ピョンとロナは階段を飛び降りる。
「はぁ？ぎゃう！！」
そのまま何かで足を滑らし階段の下に転げ落ちる。
「はい、おしまい」
その汚れ切った少女の体に落ちる影。
転げ落ちた時ちょうど、階段と床の隙間。
「ぎゃおおぅうううううううううう…ぐ…」

ブチュン…

つぶれる音。
手首だけ残して消潰された体。

「貴様…どうやってこの階段を出した！」
見事な計算勝ちをしたロナをだいぶ歩けるようになったマティアがぶん殴る。
「あう…あれをころしたからだもん」
指差すのは、一番最初にひきずられていた意識があるか無いかわか

らない少女。
見事に首が反転している。ロナが折ったのだろう。
「殺したからだと！」
また一発くらって半泣きのロナ。
「うん…だれころせばいいかなんてわかるじゃん」
何でわかるのだという質問はきっとこの餓鬼には無駄。
次からは教えろと確約だけとりつける。

「で、今度はえらく簡単そうだな」
階段を登った先。
壁に両手を固定された少女が意識無くうなだれているだけ。
床にはいろいろな武器。

第五話

「アリドラ…」
ロナが見たことあるようなこの光景に思わず口に出す。
「だからなんだよそれは」
その言葉はマティアの苛立ちを呼び覚ましてしまう。
武器を物色する手をやめロナに近づく。

「なぁ餓鬼。アリドラってなんだ？誰だ？」
「おねがい、ころしちゃだめ」
ロナが壁にくくりつけられた少女の前に走り両手を広げて言う。
「答えになってないだろう…それに殺さなきゃ上にいけないんだろ？」

「うぐぁ…」
ロナごと突き刺される槍。
後ろの少女の吐血がロナの背にかかる。
一撃で死んだのだろう、階段の下りる音。

「う…う…」
ロナの脳裏によぎる。
胸を貫通する槍…

「ほら、貴様は不死だろう？痛がってないでいくぞ？」

ボキン…

木が折れる音。

ロナは体に刺さっている手前でその槍を折っている。
ズブ…
指で押し込むようにして体の残った部分を背中側から落とす。
「さされたくなかったな…」
つぶやく。
塞がりはじめる傷。
「そうだろう？痛くなりたくなければ言うこと聞け」
ド…
階段が床につき砂埃を上げる。

「こんどのやつらは弱いな」
マティアは次の階で出会った相手を踏みつけて手を捻る。
「が…いったいなんな…」
いきなり襲われたその階の住人は何も理解していないようだ。
「教えろ、知ってること」
腕をもう少し捻り上げる。
「なな…なにを…きゃぁあ！」
またさらに強く。
「ここに来る前、来てからの事全部だ」
腕を捻られながら、早口で話す。
言葉がとまると、マティアがまた腕を強く捻り上げるからだ。
「なんだ、おまえはどこかの金持ちのただの娘で、ここではその鉄

仮面の女がもってくる食料を食っていたってことか？」
必死にうなずく。
「そうか」
手を放す。
「いつごろその鉄仮面の女は来るんだ？」
わからないと言いかけたが鼻を蹴り折られ悶絶する。

「ひゃ…た…たぶん…もうだいぶ先だと　おもいまふ…」
顔を抑える手は真っ赤。
「ふーん、たくさん飯もあるもんな」
風呂等までそろったこの部屋を見回す。かなりの量の食料のいれられているらしき木箱がある。
マティアは少し考えると、この階に来てからまだ一言も発していないロナを小突く。
「おい、どう思う…って何泣いてんだ？」
振り向いたロナは声を殺して泣いていたのだろう、ひどい顔だ。

「ん…」
殴ろうとして手を止める。
「おい、クッキーはこの食料の中にあるのか？」
マティアが聞くとこの部屋の主は、急いでクッキー缶を出してきて王様に献上するように差し出す。

「ありがと…うぅぅう」
泣きながらボリボリクッキーを食べるロナ。

「上に上がればお前のいた部屋までいくんだな」
ロナは口をクッキーで一杯にしてコクリと頷く。
「まぁ、外の階段見た限り、別にこの部屋である必要は無いだろ？」
「え…」

次の階段を呼ぶため、手際よくその鍵となる人物を絶命させる。

第六話

「これはこれは…久しぶりな顔だ」
ロナと同じ黒髪、黄色い目を持つ女性が次の階で待つ。
「戦線から戻れといわれたときは何かと思えば」
そう言いながら、豪華めなその椅子から立ち上がる。

「……ちっ」
マティアの仕事は、この塔”マリアシステム”を抜けた不死者の回収。
そのうちの一人だろう。
ロナより成長した同じ存在。

特にロナはその相手に何か特別な感情を示す事も無く、クッキーを食べているだけ。
「マティア？どうするのかな…殺さないと進めないよ」
少し煽るように不死者。
「ちっ…」
きっとこの状況を用意したのは、母である”ロナ・ハルド”、きっとここで止まるわけが無い。
推測のもとに、下の階からもってきた銃で相手を撃つ。

「酷いねマティア、毎日撃たれたよ？」
胸の中央を撃ち抜いても、流血はあれどこの反応。
痛みには馴れているのか、戦線で供給される薬物の効果で平気なのか。
そんな事はマティアにとってはどうでもいい。

二発、三発と、マガジンが空になるまで撃ちつづける。

銃の威力に、壁際に押されていった不死者までのびる、太い血の帯。
「うるせぇ…」
キンキンと金属の放熱音が響く銃を捨て、また取り出す。
「死ぬまで殺してやる」
壁際で跳ねる体。
撃たれすぎ、そこから上下二つにわかれそうな胸部。

「はぁ…はぁ…」
立て続けの射撃に手首が痛む。

「マティア…死なないのを誰よりもわかっているでしょう？」
ジュルジュルと戻る。
今までの傷の逆再生のように。

「だまってろ…」
今度は二丁。

「はぁ…この化けもの…」
残りはあと一丁。
蠢き人の形に戻ろうとする肉塊にそれを向ける。

「！？」
気配、訓練されきった動作が自分の背後に銃を向けさせる。
鉄仮面の女が外から入室して…

バン！

躊躇無く、鉄仮面を撃ち抜いたはずだ。
「…邪魔するな」

「あびゅ…ありど…らを…殺さないで…」
右頭部がぐちゃぐちゃに爆ぜたロナが両手を広げ守るようにしている。

「黙れ…」
もう一度狙いを合わせる。

バチャ！！

例えるなら、血と臓物を頭から被るような感触。
「てめ…」
再生途中の不死者がマティアに覆いかぶさる。

「あはぁ…よ…そ…みは…だめ…」
発声も満足に行えない肉体が纏わりつく。

「チッ…」
それでも構わず、銃を鉄仮面の女に向ける。
「ばかやろ…」

バコン！

ロナの蹴りがマティアに直撃する。
「アリドラを殺さないで！」

カラン…カン…

最後の銃は手の届かないところへ。

「あ…あなたも不死ね…」

「がっ…」
不死者が繋がりかけた腕をマティアに叩き込む。

バチン！！バチン！！！

「あ…く…」

隙を与えない殴打が続く。

「おい！！　がはっ…　糞餓鬼！！銃を！！！！」
手を伸ばしても届かない。
ロナはそれに応じない。

「アリドラを…」
血で濁った視界で見える、また泣いているロナ。

「く…あ…」
これ以上殴られるとやばい。
指先にダメージが痺れとして現れる。

自分の頭が石畳にぶつかる音。
うっとおしい餓鬼の泣き声が、その時だけ聞こえない。

「ロナ！！！そいつはお前のアリドラじゃねぇだろ！！！」

これが最後の言葉か。
呼びたくなかった名前。
許せなかった、たかが兵器に己の母と同じ名が与えられたこと。
自分は、それを回収して出荷するための管理者として作られた。
不死者など、腕を落とし、首を逆に向けてやれば大人しくなる存在。
戦線に行く絶望なんかよりも、もっと大きな絶望を与えてやれば簡単だった。

そういえば、二人の不死を相手にするのは、はじめてだったな。
もう頭がぶつかる音すら判別できない。
静かになってくるものだ。

ただ揺れているかんじがするだけ。

何も考えれない。
膨張する空気のような感覚だけが自分を包んで溶かしているような…

「あ…？」

死んだのか。これはあの世かと、くだらない事を思うものだ。
自分は明晰に物事を判断できるはず。
この状況はわかっていた、それでもそう思ってしまうのは不思議なものだ。
ロナが自分を助けた。

「…いっ…て…」
酷い頭痛、体を起こすのも嫌だが、階段が降りてきているのには備えなければ。
力が入らないが、それでも。

「くそ…」
再生しているのはわかる、自分の体。
マティアは、この建物に入ってから、はじめて追い込まれる自分を体験した。
それに困惑は無い。
そういうものだと思う。
母が自分に与えてくれた試練だ、そして自分は大切な存在であるという自覚。
あの研究室で作られた、様々な合成の命の中、自分と同じ種はいない。
多くを任されてきた。
ロナ・ハルドの計画に、きっと何か次の段階がある事ぐらいはわかっているつもりだ。
そしてその為に、名を与えた不死者をつくり、その管理者として自分がいる。

「はぁ…はぁ…」
やっと体を起こす。
不死者はもう静かだ。
再生の兆しすら見えない。

「……アリドラか…」
立ち尽くすロナ。
その足元には、深く心臓まで届くように抉られた、鉄仮面の女。

「僕のアリドラじゃないんだ…だから」
返り血を浴び、呆然と立つ。

「はぁ…」
ようやく再生が追いつき、立ち上がるマティア。まだ痺れが残る体。

「ロナ…いくぞ」
しょげたようなロナの頭にポンと手を置き階段を目指す。

回答をつきつけられているようだ。
階段から上がり、少し前の部屋のように壁にくくられているのは、二人。
黒髪、黄色い目の不死者と鉄仮面。
そしてやはり、今までのように床に散らばる武器各種。

「じっくり聞こうか」

鉄仮面のほうは言葉を発さない。不死者の腹にマティアは剣をつきたてる。
「話せ、全部だ」
苦痛を与え続けると、マティアのプレッシャーに不死者が語りだす。
「アリドラが槍を…刺した…それで死んで…起きたときには不死だった…」
アリドラという言葉にロナが少し反応する。

「おまえに名前は無い？そうだろう？」
少し剣をひねる。
「そうだ！！ぐああ…不死にして…戦争に…」
少し反抗的な態度、それを押さえるようにより幅を広げられる傷。
「他には…？　おい…ロナ、おまえ聞きたいことあるか？」
少し考えているロナ。
歩いて近づき、マティアより前に出る。
「ねぇ、ぼく…アリドラは…話せないの？」

「多分…」
自信なさげに不死者が答える。

「ロナ、あの鉄仮面は喉をしめて声を出させない」
かわりにマティアが説明する。

急にその場を離れるロナ。

「槍はあの最上階にあったやつか？」

その質問に頷く不死者。
マティアはその腹から剣を引き抜くと隣の鉄仮面の胸につきたてる。
しばらく痙攣すると、絶命する壁の二人。

「……ロナ…いくぞ」
次の階段が降り始める。

第七話

腐敗臭、吐いてしまいそうな酸っぱさのある匂いが鼻を刺す。
天井からポタポタと無数の水滴が落ち、階段からその部屋に上がるのを躊躇う。

「う…う…」
かすかな声。
びっしょりと濡れ、腐りかけた少女が這いつくばっている。
「簡単に殺さないほうがよさそうだな」
マティアが近づく、冷たい水が背筋に入り不快。
少女に肌は青紫に、水ぶくれがあちこちにできている。
鼻を押さえマティアがロナをつれて階下に戻る。

「いいか、ロナここにいろ」
ロナを階段のしたの暗がりに置く。
武器をいくつか物色し、長い紐を持ってまた階段を上がる。

十分くらいたち、マティアがロナのいる階段の下に戻ってくる。
「さてと…うぇ」
まとわりつく悪臭に苦しそうになりながら、上の階から引っ張ってきた紐の先を強く引っ張る。

「ロナ、つかまれ」
階段の裏に体を寄せて、ロナに手を差し出す。

ゴ…ゴン…

一瞬でものすごい音に聴覚は飲み込まれる。
水
大量の水が階段をすべり一気に落ちる。

「や…ぼくおよげな…」

跳ね返りが足元に来るとロナは怯えてマティアにしがみつく。

ドドドドド…

地鳴りのような音

「……！！……！！」
ロナのわめく声も聞こえない。
マティアは必死に足元が水に運ばれないよう体を張る。

「おい、いつまでびびってんだ」

ガタガタと震えるロナをたたき起こし、階段をあがる。
綺麗に流されて何もない部屋、階段は降りている。
「そうとう溜まってたみたいだな…」
流れた水の量とマティアの推測。
「おい、ロナ、こっから上は知っているだろ？」

階段をあがると、その部屋も流されて何も無い。
今までと違うこと、上に上がる階段がある事。

「あ…」

かつてみた景色。
少しだけ手すりに残るのは何かの機械の一部。
この部屋でかつて、ロナとアリドラは上に登るため折り返した。
「お、おいロナ！待て！」
階段を駆け上がる。
急いで。

「ここ…アリドラの部屋」
マティアが追いつくと、息も切らさずロナが部屋の前で立ち尽くす。
アリドラとすごした最初の部屋。

「おまえが生きてるって事は、お前のアリドラはいるはずだ」
何故か勇気づけている自分に少し違和感を思いながらマティアはそう言った。

「うん！」
元気な笑顔。

「この部屋で水がきたの！」

一つ上の部屋。
ロナが説明する。
階段は無い、天井の板がはずれあいた穴だけ。
「あの上にアリドラはいそうだな」
ゴールも近い、マティアをその気持ちが押す。

「よし」
階段をいくつかおりて見つけてきたロープ。
それを上に投げて、なんとかひっかける。

「これで上にあがれるな」
何度かそれをひっぱり強度を確認する。

予測したとおりだ。

「アリドラ！！」
ロープを後から登ってきたロナが叫ぶ。
部屋の壁にもたれかかる、今までで一番幼い鉄仮面。

その声に反応し必死にこちらへ向かおうとする衰弱した鉄仮面。

「アリドラ！アリドラ！！アリドラ！！！」
抱き寄せるロナ。

「少し、痛むぞ」
ロナの横から手を出し、短剣でその鉄の仮面をマティアがこじあけ

た。

「はぁあぅうううう」

大きな呼吸。

「…ロナ…」

幾日ぶりに出した声。

「アリドラ…ごめんね」

最終話

会話は少なかった。
アリドラの酷い衰弱を気遣い、背負い階段をあがる。

「…これか」
不死を生み出す槍。
横に落ちている二枚の紙”通達”。

その内容。
ロナ宛のもの
『失い不死となれ　望まぬのなら外に出よ』

アリドラ宛のもの
『隣人に無き物を与えよ』

「”与える”アリドラか…」
一つしたの階で死んでいたのもアリドラ。
アリドラという存在が命を与える為の施設、この塔”マリアシステム”。
大きな扉を出れば、同じマリアシステムが乱立する。

「…なに……」
アリドラが霞んだ目で捉えた空。

こちらに向かってくるのは、無数の飛行機。
そこから落とされていく、赤い火。
赤い火は、地面に触れて大きく爆発する。

「戦争が終わっただけだ」
マティアは理解している。
確実に近い推測。
本来兵器である”不死者”。ペアであるアリドラを殺さなければ死なない者たち。
戦争が終わったから、不死者はもはや必要ない。
このマリアシステムのエリアを空爆、そうすれば”アリドラ達”は死ぬ、そして不死者も死ぬ。

「特別らしいな…マザーにとって…」
マティアの言うとおり、救援のヘリが近づいてくる。

「ご苦労様」
ロナ・ハルド、彼女達をここに置いた張本人も同乗したヘリがつく。

「マティア、あなたは優秀よ」
思わず嬉しさで頬が緩むマティア。
ヘリから降りてきた数人が、ロナ達を乗せる。

回転する羽の音。

「ロナ？アリドラに謝れてよかったわね」
ハルドの問いかけにロナが頷く。
「マティア、ご苦労様これでこの子達は神となるわ」

「神…？」
マティアの頭の中にいろいろな考えが走る。

ドン

銃声
「え…」

マティアの胸に撃ち込まれた弾。

ガララ…

「あ…な…なんで…」
分厚いヘリの扉が開き、マティアの体が中空に放り出される。
空しく手を伸ばす。

「お疲れさま、あなたの役目はここまで」

ハルドの、無感情な目線。

「く……　ろ…ロナ…」

身を乗り出して、落ちていくマティアを掴んだ小さな手。
「マティア」

強い風圧に体がもっていかれる。
それでもしっかりと繋がれた手。
ロナがマティアを落とすまいと必死に…

「ロナ…」
マティアの目に涙が浮かぶ。

「マティアは、ぼくが落とさなきゃね」

ロナはそう言った。
風の音でうまくは聞こえなかったけど、確実にそう言った。
そして、手を離した。

ヘリが大きく旋回する。

爆撃の音が大きく近くなっていた。

少女神話

アリドラはだいぶ回復した。
ロナはずっと寄り添うように付き添っていた。
その様子をロナ・ハルドはずっと眺めていた。

アリドラが知ったこと。
”マリアシステム”は科学、宗教学等に基づき、不死を作る為のもの。
”アリドラ”はその不死の父なる存在で、不死の命を与えるもの。

「正直…ほっとしてるわ…」
ロナの頭を撫でながら、アリドラはそう言う。
自分の身の上、自分が培養液の中で作られた存在”合成”である事等はもうどうでもいい。
考える事よりも、今自分が安全な場所にいる事が一番大切。
綺麗な黒い服、そしてロナは白い服。

「アリドラ…ごめんね…」
あれからずっと謝るロナ。
毎日、起きてる間ずっと。
くだらない理由だ、自分達は神に匹敵する戦後の象徴の為に作られたのだから。
本当だと思い込まされただけ。
アリドラに姉なんていない、そう思い込める同じ顔の”合成”が一

緒にいただけ。
それを全て決めたのが、あのロナ・ハルド。

「気分はどうかしら？」
部屋にハルドがやってくる。

「アリドラは今はもう、あなたしかいない」

「命に違いは無い」

正直、アリドラは自分が作られた存在である事を最初は受け入れれなかった。
気が狂いそうになる現実。
姉への悔恨も、ロナと駆け抜けたあの建物の恐怖も、鉄仮面の閉鎖的な圧迫感も全て決定されていたことだと。
ただ幸いなのは、戦争の為では無く、戦後の為に作られたのが自分達である事。

それから二月後、ロナとアリドラはハルドに呼ばれる。

「アリドラ、ロナ仕事よ」
その部屋の壁に並ぶ、いくつもの大きなモニター。
モニター一つに対し一人、映し出されている。
いくつかのモニターは暗いまま。

「こんばんは皆さん、今後の世界を決める会議をはじめましょう」
ハルドが椅子に座りそのモニターの人々に挨拶をする。
映っているのは、諸外国の中心人物ばかり。

誰も話さない。
その理由は、ハルドが示した圧倒的な戦力、そして不死の畏怖。
「くく…では不死について話そう」
ハルドは淡々と話を進める。

「あなたたちの国では今、私の不死達が死んだわよね？」
マリアシステムの空爆で、大量のアリドラが死んだ。
そして戦場の不死たちも連動して一斉に死んだのだ。

「そこで、新しい不死の形がこの子達」
ロナとアリドラ。
一同がどよめく。

「怖がらなくていいわ、私と同じシステムでは無い」
ハルドが言い切る。
「ただ新しい教育をしたの、この子達は人並みの感情を手に入れている」
驚かれているのはアリドラにも分かる。

「ああ、アリドラ驚かれているのはね、あなたたち以外の不死は…」
そんなアリドラにハルドが説明をはじめる。

バン！！！

「……あら」
いきなり脳天を撃ち抜かれ倒れる世界の勝者。

「マティア！」
ロナが嬉しそうに見た先、銃を構えたマティアが。

「ロナ、貴様らは今後の世界に必要ない」

バン！！

「ぎゃふ！！」
アリドラを撃つマティア。

「なんで…マティア…」
撃たれていないロナが倒れる。

「各国のお偉いさん達、これが不死だ」
マティアが前に出てモニターに向かう。
「アリドラという存在に命を持たせ、戦場の不死たちは空。
アリドラを殺せば不死は死ぬ、そういうものだ」
演説するように話は続く。
「我が国の首謀者、ロナ・ハルドも不死だ。これはその一つ…」
転がるハルドの死体に目線を向ける。
「ハルドが死ねば…この国のシステムが、同じ記憶を与えられたハ

ルドをまた作る」

「ハルドが復活するまでの時間はあと四時間、いくつかの国はそれまでにここを攻撃できるだろう」

そういってモニターの電源を落とすマティア。

「上出来よマティア」
満面の笑みでぶどう酒をかたむけるハルド。
「ありがと！」
ロナ、そしてアリドラ。
「ヘリから落とされたときは死ぬかと思ったぞ」
マティアがロナを小突く。
「……自分と同じ顔の死体は気分悪い…」
アリドラは少し顔色が良くない。

ロナ達のいる国は、火に包まれることは無かった。
簡単な事、ロナ・ハルドが国を治め、戦争をはじめてから約五百年。
誰もモニター越しのハルドが倒れ、その従者が叫んだ話を、大半の国が信用しなかっただけ。
ただ、少しだけおきた事とすれば、世界地図上のいくつかの国が、ロナ・ハルド亡き後の技術を奪い合う為に消えた事。
数年後、ロナ・ハルドは、人々の前に顔を出し、”自信の生存の確実性”と、各国に投降を要求する。
「これで残りは半数ね」
半年後、ロナ・ハルドはとある国の首相を呼んだ会話の中でそう言う。

その後もロナ・ハルドの圧倒的な制圧は進む、しかしそれは戦争と呼べるほど長くは続かないものだった。

これは、世界がその大半を死滅させたある日の事。

「マティア、神の用意はできたかしら？」
神殿のような、空が一望できる高い椅子。
そこに座らされるのはロナ。
虚ろな黄色い瞳。

「……どうして……」
罪人のようにその前に連れ出されたのはアリドラ。
「マティア、見せてあげなさい」

ギリ……ギリ…

鎖で繋がれたアリドラの体が中に浮く。
「命を与えた者を殺せば不死は死ぬ」
それを見ながらハルドが呟やきはじめる。
「私も施設を破壊されればバックアップが消える」
アリドラが、玉座のロナの真上に…
「では、本当の不死は…マティアわかりやすく世界に説明しなさい」
強く、そして静かに命令する。

「…聞け、世界よ。神には資格等無い、あるのは命の受け渡し」
玉座の下で話す、眼前には何も無い荒野。
その声を世界に届ける為の大掛かりな機械が一つあるだけ。
「命を与え、それを所有し、それを返す」

ゴキュン…

吊り下げられたアリドラの体を縛る鎖が絞まる。
「がぁ…」
漏れるのは嗚咽。
体の節々から血が滴る。
「神殺しとは、神を生み出す事だ」

ゴキュ…
また一段と絞まりその血がロナに降る。

「あ…アリドラ…」
ロナの眼に光が戻り名を呼ぶ。

「ロナ…」
その声にアリドラも名を呼ぶ。

ゴキュ…

「あああああああああ」

また絞まる鎖。

「や…やめて！！やめてぇえええええええ！！」
ロナの叫び声が響く。
玉座から駆け下り、マティアに詰め寄る。
「マティア！！やめて！！やめて！！！」

「何を言っている？おまえの命をおまえのものにするだけだろう？」

「アリドラ…」
ロナが振り向く。

アリドラの背中。

「ロナ…」

小さな声。

「あんたなんかに…クッキーあげるんじゃ無かった」

アリドラは死んだ。

「成功ね」

ロナ・ハルドは”単体の不死の完成”に歓喜した。

その喜びは逆上したロナにその首を折られても、一声もあげない程。

マティアは理解できなかった。

完璧な不死者としてくれた母なる存在を殺す事が。

己の高い戦闘力を全てロナにぶつけた。

細切れにしても、踏み潰してもロナは元に戻る。

そして疲れて

「…もういい…」

切っ先を自分の喉に向けた。

「マティア！！まって！！」

ロナは叫んだ。

マティアはそれを意に介せず自刃した。

「…………」

「だれか…ぼくの声…きこえる？」

世界に繋がる機械に向けて呟く。

反応があるはずが無い。

「…いいいいいいいぃいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

ロナはマティアの首から剣を引き抜き自分の腹を捌く。

こぼれ落ちた臓物の上にうつ伏せに倒れる。

暖かい。

「はぁ…はぁ…」

床に残る血糊を残して、元通りになる体。

「あああああああああああああああ！！」

一思いに首を落とす。
転がる首、回る視界。

「あ…きみは…だれ？」

落ちた頭に歩いてくる体。
それはロナ自身の首の無い体。
優しく拾い上げられるロナの頭。

「きみ…顔ないね」

そしてまた一つに戻る。

「あれ…どこにいったのかな…ねぇ…」

また首を落とす。

「あ…またあえたね」
転がる首。
歩いてくる体。

E
N
D

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1347p/

少女反逆～少女権利　第二章～

2011年1月20日13時01分発行